

沖縄修学旅行フェア2019 in大阪

奈良教育大学附属中学校



沖縄修学旅行の
取り組みから
これまで
そして
これから

奈良教育大学附属中学校
研究推進部長 竹村景生
2019.12.26(木)
場所；ハービスOSAKA

本報告の流れ

[1]はじめに 奈良教育大学附属中学校の紹介

学校の概略 附中が大切にしてきた行事活動（特活・総合）

[2]これまで取り組んできた沖縄修学旅行の流れ

[3]本校の沖縄修学旅行のねらいについて

[4]民泊への転換

[5]学生ガイドと共に そして. . . .

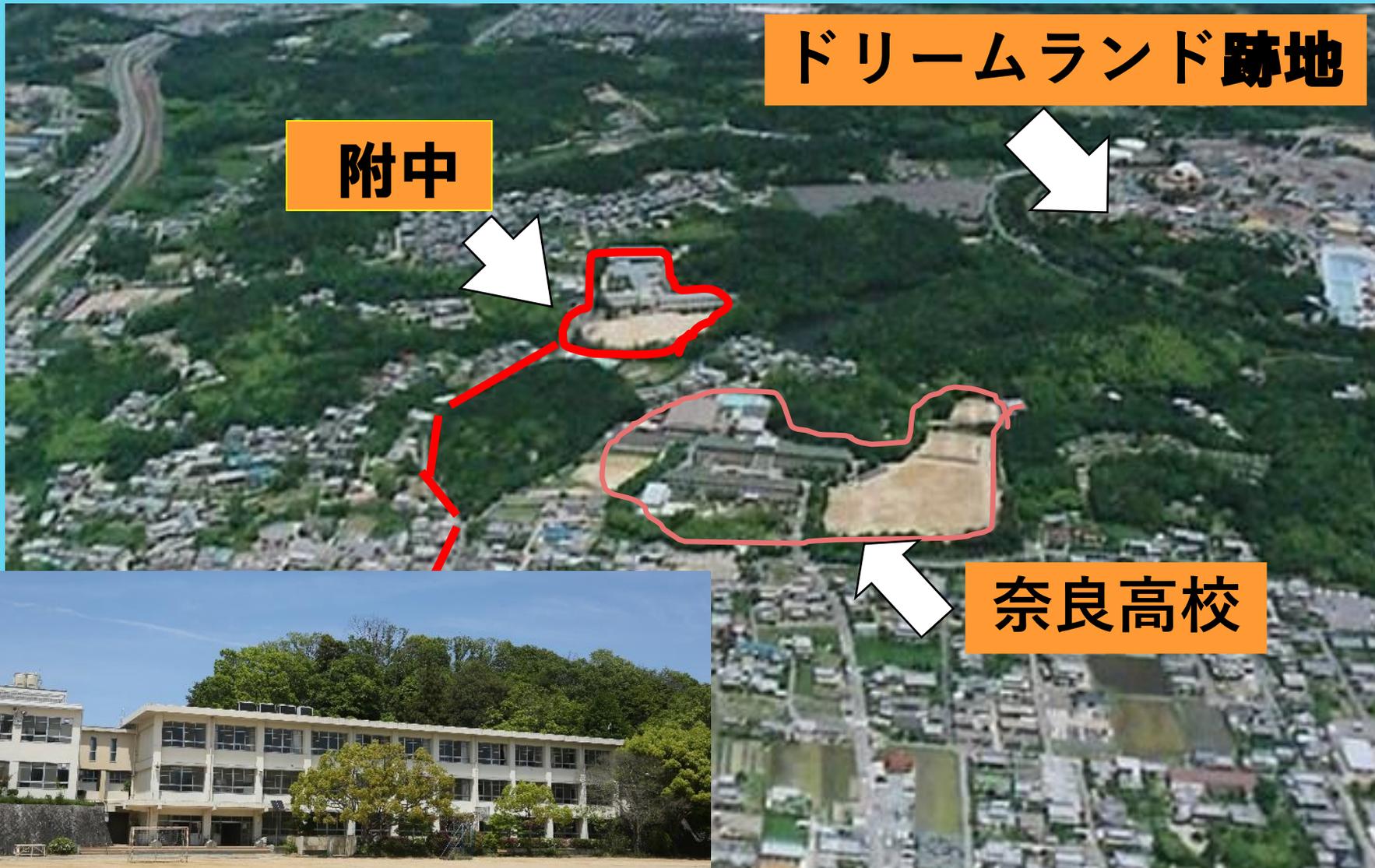
[6]沖縄にしかない学びの意味と価値とは何か？

思い出づくりか？平和学習か？のはざまに揺れて考えてきたこと

[7]新たな柱を求めて ESD SDG s の学びの深化から

[8]課題として残されたこと 中学側の思いと提言

私たちの学校を空から見たら。。。里山の中



附中

ドリームランド跡地

奈良高校



奈良教育大学附属中学校

目標

- ・真理を求め、平和を願い、しあわせな世の中を築く人間に。
- ・科学と技術の基本を身につけ、すすんでものの本質をきわめる人間に。
- ・自由と責任を重んじ、粘り強く現実を切り開く人間に。
- ・みんなのいのちや願いを大切にし、あい励まし合い助け合う人間に。
- ・豊かなところとたくましいからだをもち、明るく健やかに生きる人間に。



在籍数

1年 136名(6名)

2年 138名(6名)

3年 156名(6名)

各4クラス

(含む特別支援5組)

創立73年目

創立1947年

奈良県奈良市

法蓮町2058-2

奈良県の北部で
京都の県境にある。
平城旧跡が近くにある。

ユネスコスクールである 奈良教育大学附属中学校
わたしたちが取り組むESDとは？

生きること つながりあうことの
意味を探り 実現したい社会を
想像的に創造できるひとに



○ユネスコがよりよい未来を創るために進めている

Education for
Sustainable
Development

「持続可能な開発のための教育」のこトです。



[2]これまで取り組んできた沖縄修学旅行の流れ

それでは 沖縄修学旅行 本題に入っていきます
まずは事前学習の様子から

○沖縄で何を学ぶか 10月

- ・ 沖縄修学旅行のねらいと
大まかな日程の説明
- ・ VTR「美ら島 沖縄」

○映画「ホテルハイビスカス」視聴

- ・ 事前学習の進め方について
ひと・もの・ことの多様性



ひと・しま・いのち 映画「笑う沖縄」視聴



終戦直後、三線片手に歌い踊る男二人がいた。「命(ぬち)ぬ御祝事(ぐすーじ)さびら！ぬちぬぐすーじさびら！」(命のお祝いをしましょう！) 収容所を抜け出した小那覇舞天(おなはぶーてん)と弟子の照屋林助(てるやりんすけ)だった。民間人の4人に1人が犠牲になったとも言われる沖縄戦。その直後、人々が悲しみと失意のどん底にいた頃のことである。ある者は戸惑い、ある者は怒ったという。「こんな時にお祝いだなんて！三線なんか持って頭おかしいんじゃないの？沢山の人が死んだんだよ！」対して小那覇舞天はこう答えたという。「生き残った者が毎日泣き暮らしては死んだ者も浮かばれません。生き残った私達が元気を出さなくてどうしますか。命のお祝いをしましょう！」

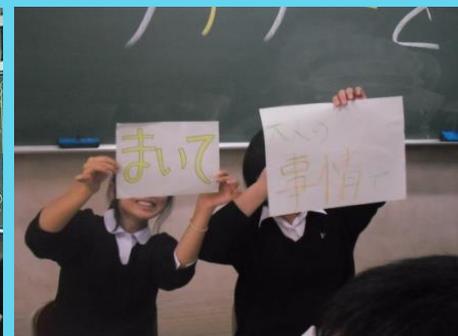
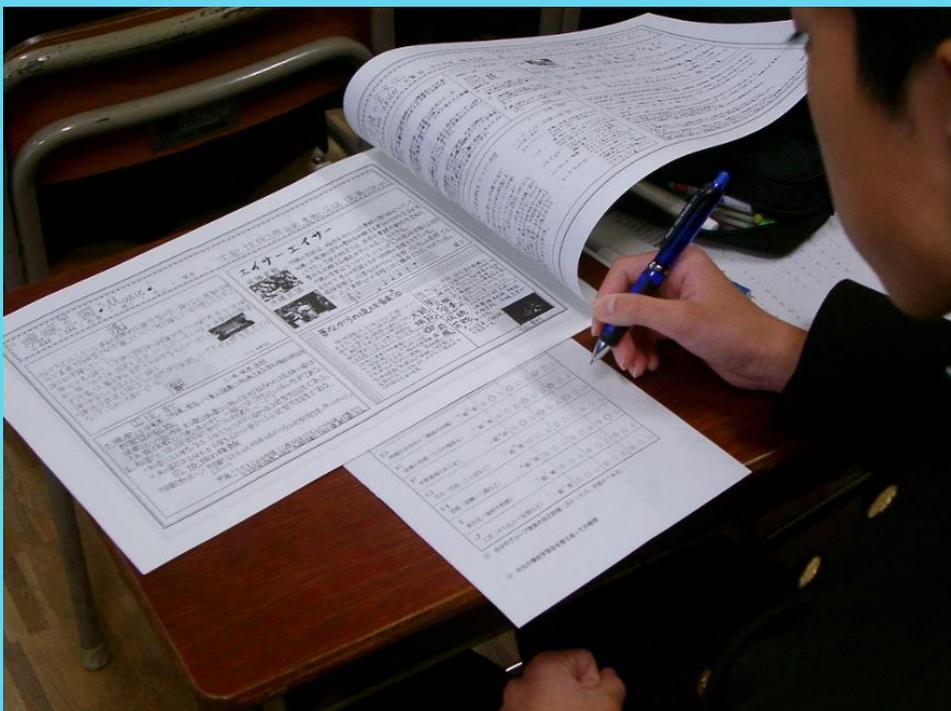
映画「月桃の花」 視聴

2年人権学習会12月8日



凄惨をきわめた沖縄の戦場をさまよった、ある家族の物語を実話にもとづいて描いた作品。沖縄戦とは何だったのか？を住民（民衆）の視点から考える。また、沖縄戦は戦後も含めてどのように語られてきたのか？についても考えてみる。（自分ごととして）

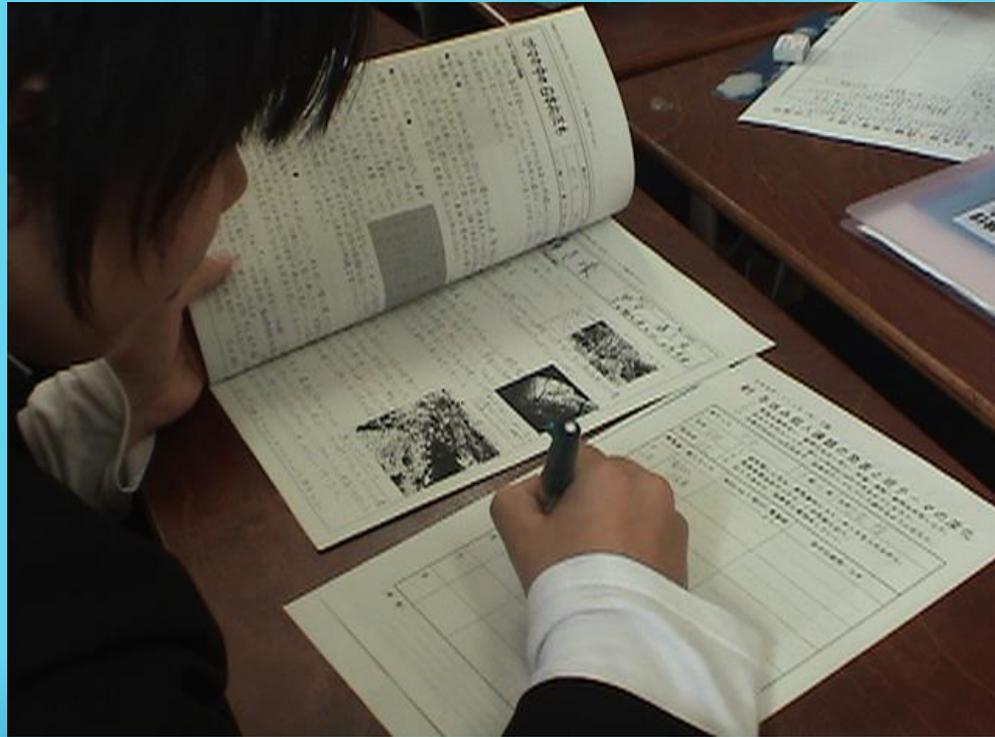
事前学習第1ステージ 11月・12月



「ウチナーを知る」～沖縄のあらましをつかむ～

- ・「自然」・「あゆみ」・「産業の特徴」・「米軍基地のあらまし」
 - ・「文化(信仰や言葉)」・「芸能」・「食文化」・「工芸」
- 班で分担して調べ、発表する。

個人研究のグループ内交流



事前学習第2ステージ

タクシープランに向けて

「学生平和ガイドとそして
チューターガイド
制によってつくる沖縄
の旅」に向けて

～2日目のグループ別平和学習の
プランを作ろう～



- 「鉄の暴風」
 - 「戦争と住民」
 - 「ガマ」 ・ 「学徒隊」
 - 「基地と環境問題」
 - 「米軍基地と住民生活」
- などをキーワードにして
フィールドワーク先の
→調べ学習
→コース作り

コース作りに向けたウェビング



学生ガイドによる助言と出張授業



学生ガイド(この時期は「虹の会」からのスタートの頃・第1期メンバー)
平和の問題に学生たちがどのような関心をもって、平和ガイドをはじめたのか？
平和学習の視点。あなたたちは沖縄で何を見、学ぼうとしてるのか？を問いかける内容であった。ただ、それだけではなく三線演奏があったり文化的な関心でも惹きつける内容であった。

沖縄修学旅行の概要

- ・ 実施日：5月中旬の(土)～の3泊4日
(かつては4月上旬；2・3年クラス持ち上がりでたったので)
- ・ 方 面：沖縄本島(離島では久高島・伊江島・伊計島・古宇利島)
- ・ 宿泊地(宿泊実績)
 - 1泊目 ホテル日航那覇 (現：ダブルツリー by ヒルトン那覇首里城)
かりゆし琉球ホテル那覇 (現：沖縄エグゼスナハ)
沖縄第1ホテル
 - 2泊目 大宜味村民泊 (2017～) 読谷村民泊 (～2016)
* サンマリーナホテル (恩納村；民泊以前は連泊)
 - 3泊目 サンマリーナホテル(恩納村) ホテル・ベルパライソ (今帰仁村)

集合と解散時刻について(ある年の例として)

例年、飛行機の時間、空港がどこか？が 私たちの一番の関心事になります。奈良駅出発が7時前後になります。本校は土曜出発のために余裕がありますが、平日出発は30分出発が早くなるのではないかと予想します。年によっては集合6時15分というときもあり、この時間帯は電車通学のある本校ではご家庭からの送迎に頼らなければなりません。1日目の午後からの活動を保証していくためには止むおえない措置となっています。

○集合

5月〇〇日(土) 午前7時00分

近鉄奈良駅(行基像前)

○解散

5月〇〇日(火) 午後5時30分ごろ(予定)

近鉄奈良駅前北側(予定)

修学旅行 の日程

【第1日目】（ある年の例）

7:30 近鉄奈良駅(行基像前)・出発

↓貸切バス

9:15 関西空港着・搭乗手続き

10:45 離陸予定

↓

*機内で昼食 (弁当・各自が持参したペットボトル; 未開封)

12:50 那覇空港着 *荷物(大)は業者が宿舎へ
学級ごとにバスに乗車

14:00 魂魄の塔で平和集会

↓

14:45 平和祈念公園着 県立平和祈念資料館の見学

↓貸切バス

15:45 ガマの見学

1組 ヌヌマチガマ、2組 ティダヌチガマ

3組/5組 県庁・警察部壕、4組 轟壕

↓貸切バス

18:00 宿舎着・夕食 かりゆし琉球ホテル・那覇

20:15 平和講座 ある年の例

①安里要江さんのお話

②前野喜代(ひめゆり学徒)さんのお話

第1日目の様子



平和ネットワークのガイドを基本として、バスには2日目のタクシープランの学生ガイドも同乗することもある。ホテルでの講演会も学生ガイドは参加し、終了後タクシープランの班のメンバーとの打ち合わせをする。

【第2日目】タクシープラン

8:30 大型タクシーに分乗、計画に沿って活動
・ 学生平和ガイドが1名ずつ同乗

EX; **やんばる与那地区へのフィールドワーク**



18:00 各民家へ 食事手伝い後夕食
年度によっては平和講話を入れる
インタビュー 就寝







奈良の生徒 沖縄戦学ぶ

国頭などで体験聞く

【北部】奈良教育大学付属中学校3年の修学旅行生156人が5月18日から3泊4日の日程で沖縄を訪れた。沖縄戦について体験者の聞き取りなどを通して学び、戦争の悲惨さや平和の大切さを心に刻み、次代の平和の語り部となることなど五つの目的を定めた。

修学旅行156人

戦世刻んで

戦後74年

「沖縄本島北部の戦争の実態を体験者の方に聞き、そこから自分たちの考えを深めよう」と山下祐亮さんや田中雪



戦争中の食糧としての野草などを見せ話す宮城さん(右)＝5月19日、国頭村奥間

樹さんら7人は国頭村奥間に宮城弘さん(83)を訪ね戦争体験を聞いた。

沖縄戦当時、国民学校3年生だったという宮城さんは「集落の高台から本部半島周辺の海域に多くの米軍艦が停泊しているのが見えた。父親から『あれが軍艦だ』と父親に教えられた」と当時を振り返った。

米軍上陸後、集落の住民は防空壕で生活したと宮城さん。明かりや声漏れないよう、布団で入り口をふさぎ木炭で煮炊きをした。宮城さんはある時、ガスが充滿した壕内で倒れたことがあるという。すぐに家族が気付き、手当を受けて一命を取り留めた。宮城さんは「いかなるこ

とがあっても絶対に戦争はしてはならない。この世に一つしかない命を大切にしよう」と話した。

「芋は命の恩人、カタツムリ、ソテツなど食べられるものは何でも食べて生きてきた」と戦争中に食べた物を見せながら当時の様子を説明する宮城さんの話に、生徒たちは身を乗り出して聴き入っていた。

尾崎正法さんは「食べていた実物を見せてもらい、戦争中の生活の苦しさを実感した」と感想。松岡明梨さんと長岡良信さんは「カタツムリやカエルなど、何でも食べたという極限状態の生活を知った」と驚いた表情を見せた。和田陽来さんと森下菜さんは



ESD環境学習 泡瀬干潟へフィールドワーク





2日目・3日目 大宜味村民泊体験

大宜味村は、背後に山原の森がせまり、目の前がおだやかな美海。夕焼けと星のきれいな村です。

共同体の祭りも継承された、村の方たちとの心温まる交流ができるところが魅力です。

【第3日目】(読谷村民泊・大宜味村民泊)

8:00 午前の活動 各民家単位で

- ・ 農作業や海での体験
- ・ 琉球文化のレクチャー
(三線体験など)
- ・ 沖縄料理体験
- ・ 畜産・酪農体験
- ・ 焼き物づくり

12:00 宿泊民家に戻り、昼食



14:00 午後の活動へ

- マリンスポーツ
 - ・グラスボート
 - ・シュノーケリング
- 選択制です。
シュノーケリングは
健康調査があります。

18:30 帰舎・入浴・夕食

19:30 夜の集い

ホテルのマリン

体験メニューです。

夜は、ホテル広場で

クラス対抗のパフォーマンス大会



【第4日目】



7:40

宿舎を出発



*荷物(大)を宅配へ

8:30

首里城公園着・見学



*第32軍司令壕跡

10:10

国際通りで買い物と

昼食(4人班)



*各自モノレールで移動

13:00

那覇空港に集合

14:05

那覇空港を離陸



16:00

伊丹空港着(予定)

17:30頃 奈良到着
バスごとに解散

※帰宅した翌日は疲労回復
その翌日は振替休日
(5/10日○日の土・日分)

その週の金曜日は登校し
ワークシート回収とアンケート
(資料)

以降は事後学習8時間で
ルートMAPづくり 国語;短歌
タクシープラン交流学习・全校
発表会文集作成へ
(持参したものを参照してください)



服装について

<1日目>

男子：私服

女子：私服(スラックス)

* ガマに入ることを考慮

* 平和学習に配慮

<2日目>

男女とも制服

* 半袖が適当

* 活動により私服も可
事前に相談

<3日目>

男女とも私服

* 活動に応じた服装を

<4日目>

男女とも制服

* 長袖がよい

※ 宿舎内は私服とする
がスカートは禁止

※ 履き慣れた運動靴

持ち物について

(1)衣 類

- ・制服：夏服
(カッターは長袖も)
- ・活動着、室内着
(学校のジャージなど)
- ・着替え(下着類)
- ・帽子、軍手
- ・その他
(3日目の活動関係)

(2)日用品その他

- ・生徒証
- ・しおり、学習記録ノート
- ・洗面具、タオル(宿舎有)
- ・雨具
- ・ナップザック
- ・懐中電灯(ガマ用)
- ・常備薬
*他人にあげない
- ・カメラ
*各自の責任
(使い方については実行委員会で話し合いをしています。)
- ・遊具はカード類のみ
- × 携帯電話、ウォークマン
本・マンガ、GB等

(3)お小遣い

10,000円以内厳守

但し、2日目の活動費・
2, 4日目の昼食代・
4日目のモノレール代・
お土産代・その他として

【引率教員ほか】

校長以下13名

添乗員2名(+現地2名)

写真屋さん



費用について

【共通経費】

航空運賃(往復)・宿泊代・バス代・ガイドさん
及び講演者等への謝金・2日目タクシー代・
高速代・旅行傷害保険・航空機変更保険など

【オプション経費】

2日目の活動費(各自の小遣いより)
4日目の活動費(各自の小遣いより) など
計約 87,000円となっていて、学年会計から

別途謝金等を支払って修学旅行費用を補填している。

「修学旅行」の取り組みは事後学習（8時間）も大切にします。

事前学習に重点を置くか、あまり先入観を持たせず、ありのままの沖縄を感じ、事後学習に重点を置くか。考え方はあるだろうと思います。

本校では、修学旅行文集にまとめ、個人の学習の記録、タクシープランのルートMAPの記録、学生ガイドとの交信の記録、教科学習（国語、社会、家庭、美術）で、構成します

学年全体としては、感じたことの「もやもや感」を言語化するために、実行委員会を中心に、意見表明の場「平和のつどい」にむけた話し合いの場を設定します。「附中平和宣言」の発表、パネルディスカッションなど活発に取り組まれます。



[3]本校の沖縄修学旅行のねらいについて

修学旅行のねらい

- ・ E S D の視点から、ウチナーの多様で多層ないのちのにぎわいを体感し、未来を創造する言葉を紡ぎだそう。
- ・ 平和学習　～次代の「平和の語り部」となろう～
- ・ 沖縄の「今」について考えよう。
（持続可能な地域社会って何だろう？）
- ・ ウチナンチューの心にふれてみよう。
- ・ 豊かな自然と人間との共生について考えてみよう。
- ・ 協同による学び方を身につけよう。
- ・ なかまとの友情を深め、多くの思い出をつくろう。



**なぜ、このような「ねらい」を設定したのか？
次に、ねらいにつながっていく背景を解説します。**

ESDを柱にした3年間を通じた 「奈良めぐり」が背景にあった

奈良の世界遺産・地域遺産 ひとや風景を通して「こと」に出会う

【ねらい】

- ▶ まず現地に立とう。そしてひとに出会い、奈良を「（自分や地域や出会う人に流れる）
歴史的時間の視点」から見つめ直し、考えてみよう。
「問い」を持って見れるようになろう。
 - ・・・地域を教材化するとはどういうことだろうか？
- ▶ **そこにあるものがなぜそこにあるのだろうか？**
 - ・・・「ランドスケープ」って何だろう？
- ▶ 体験を通して学んだことを誰かに語ってみよう。インタープリターになってみる。
 - ・・・「自分ごと」として考えるってどういうことだろうか？（「当事者性」の獲得を）



学び方のスキルを通して 深い学びを獲得する。

家をはじめ檜（やぐら）や城壁の壁は、とても白く明るく輝いていた。また、すべての家屋と城壁の屋根は、美しく快いさまざまな形をした、指二本の厚さのある黒い瓦が葺かれていた。宮殿の部屋の壁には、日本と中国の古い歴史物語が描かれ、それらの絵のまわりの空白部分はすべて金箔が貼られていた。

（『耶蘇会士日本通信』 一部要約）

事実から知る・・・資料にあたる

「宣教師アルメイダの書簡」

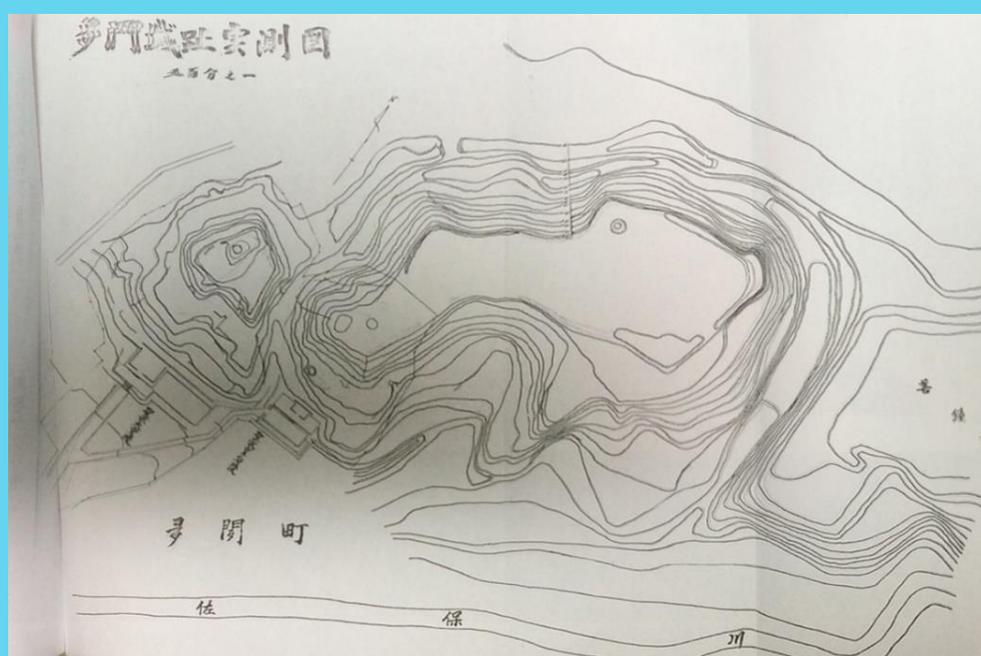
■ 資料をどう読めばいいのだろうか？

そこに何が書き込まれているのだろうか？

そこから何が見えてくるだろうか？

専門家から手ほどきを受ける



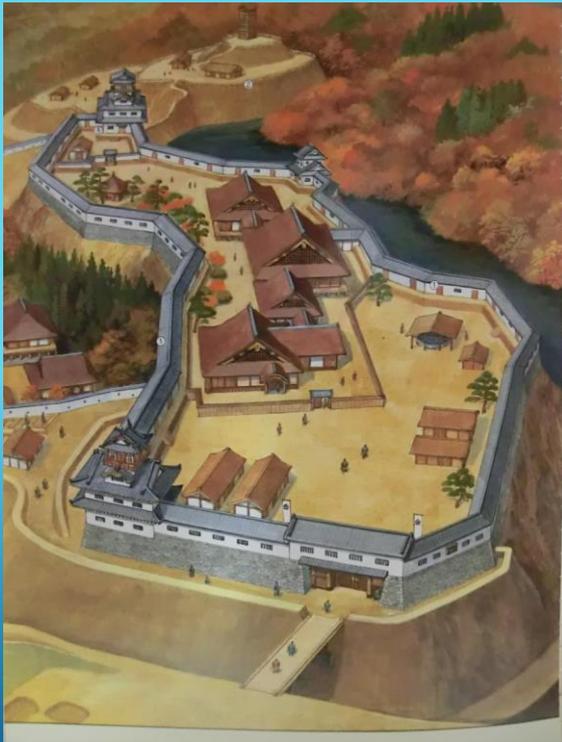


- ▶ 実測図の等高線からわかること。
等高線上・流域圏から見えてくるものがある。

地元学の知見をなぞってみる。

沖縄の戦跡や文化、暮らしを見る
視点にもつながってくる。

— 学び方の技法 —



2年 臨海実習（鳥羽・答志島）で出会う

「もの」「こと」「ひと」

地域のプラットフォームとしての海の博物館からの学びの
広がり・ひとのつながり

現地でのフィールドワーク

ひとは何を大切にしてきたのか？

博物館学習を核にして

（学びの広がり・ネットワーク）

地域のキーパーソンは誰？

地域の産土（うぶすな）って何？

「空間の履歴」に出会う学びの深さへ

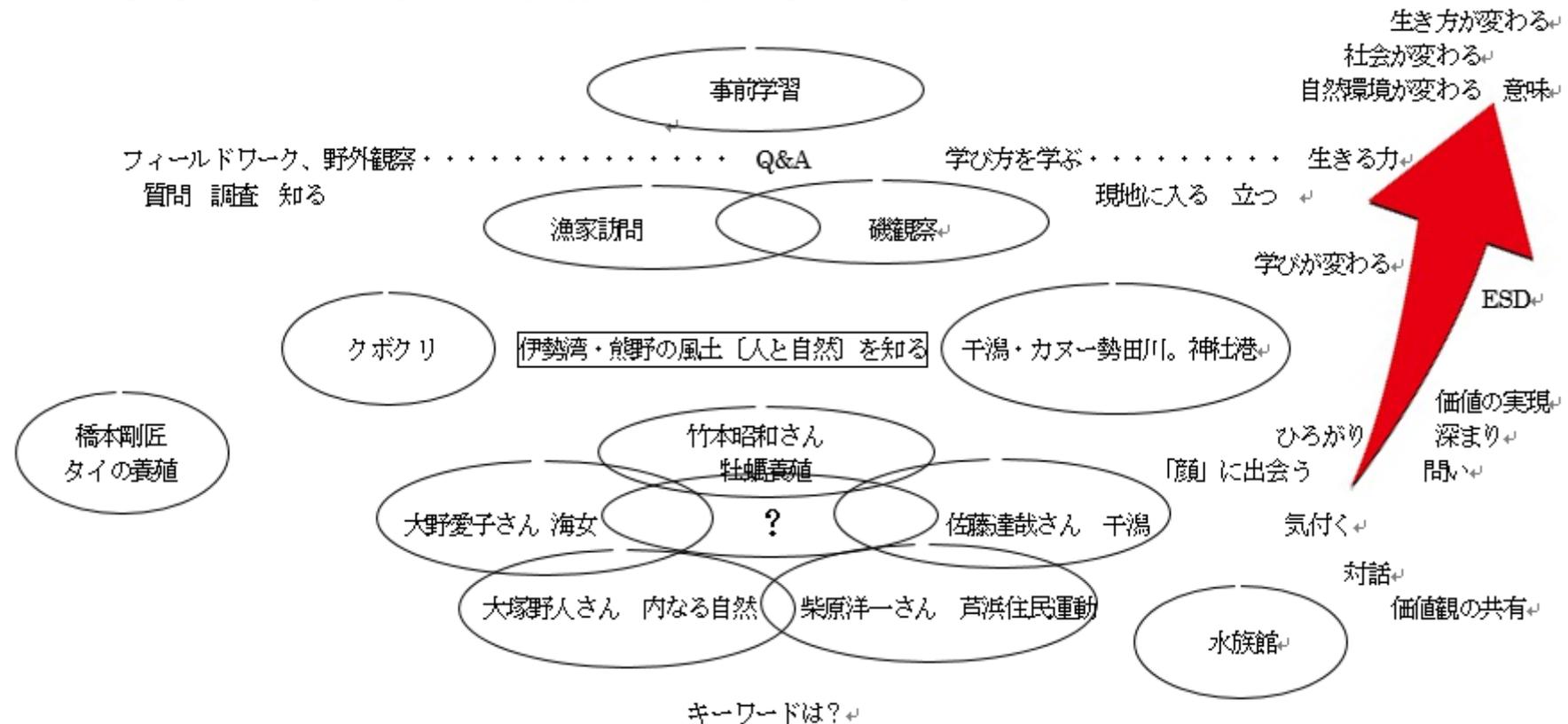


臨海のキーマンは誰か？

石原義剛 海博館長に出会いなおす
彼は、何を語り 誰とつながっていたのだろうか？

■5人の講師の方の話から 「臨海」はどのように深まっただろうか？

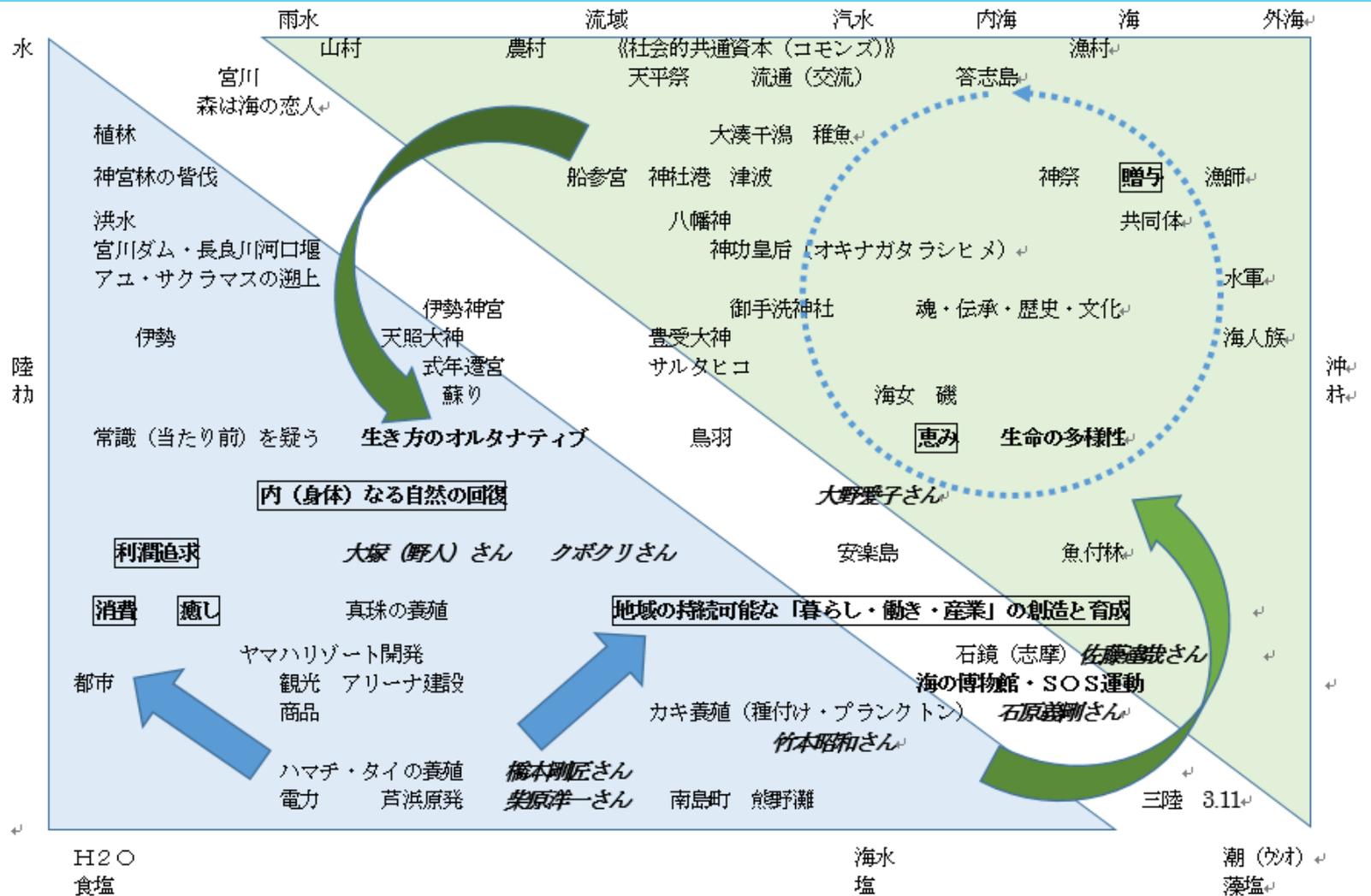
伊勢・志摩をフィールドとして生きてこられた人たちから、私たちは何を聞き、聴き取ったのだろうか？



中世社会史をたどりながら、イリイチはいう。「水が科学的思考の対象となり、技術的な手を加えるべき“H2O”に転化したとき、すでに水は汚染の象徴とされるべき運命にあった」と。これは近代という概念そのものに内在する問題でもある。近代とは、環境問題というエンブリオ（胎児）をその体内に宿して出産したのかもしれない。（1995-35）

流域で捉えてみるESD・MAP

いのちのつながり恵みの循環



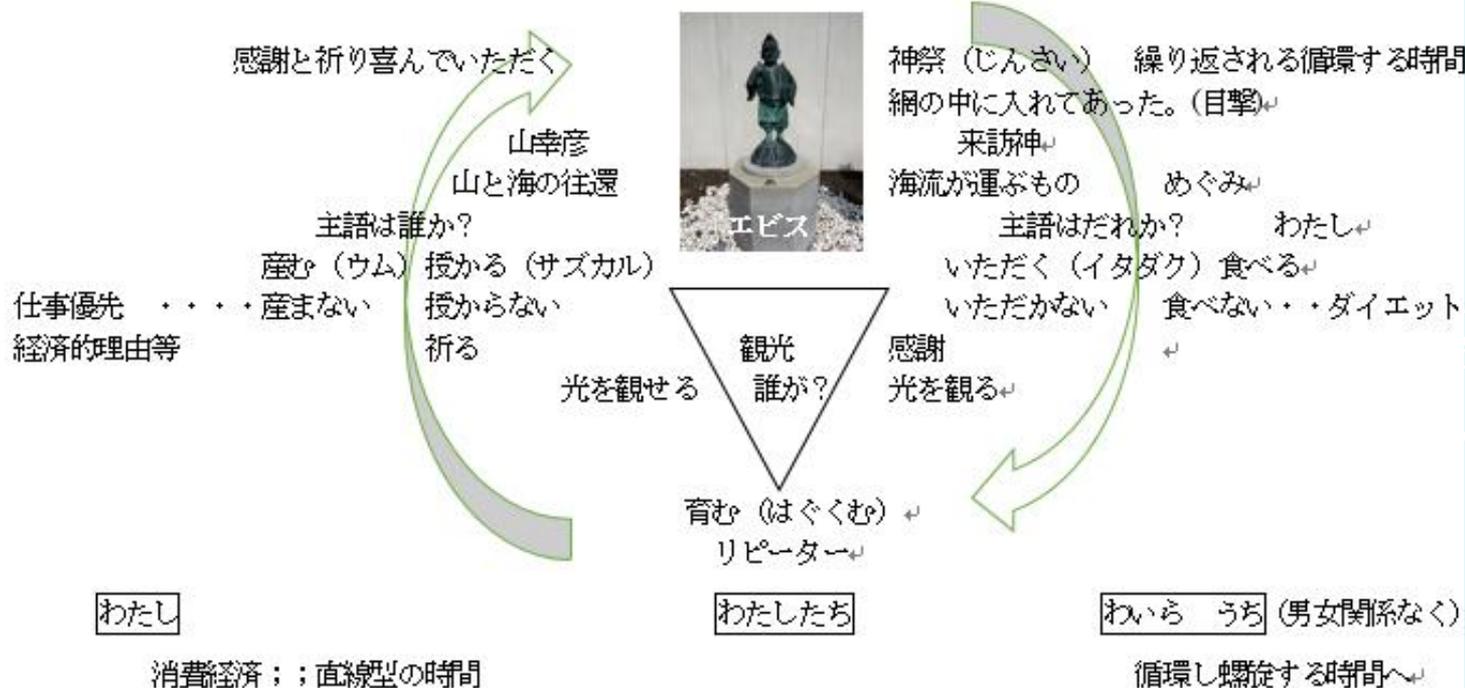
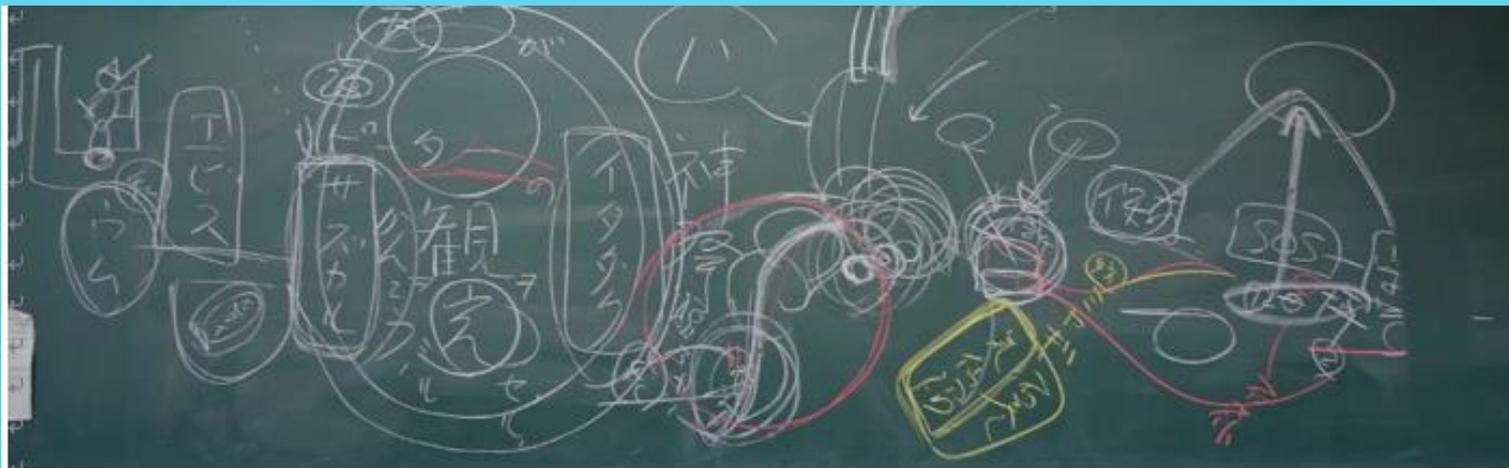
潮というのは海が「生きている」「生命」とあるという認識

その昔、沖繩の漁師の代名詞であった糸満海人 (いとまんうみんちゅ)。

月の満ち欠けで潮を読み、小型の木造船サバニを操って豪快な追い込み網魚アギヤーを展開するその姿は、海の勇者を意味する「海ヤカラ」として讃えられてきました。

地域の暮らし文化の根っ子にある産土は何か？

恵比須様



「えびす」を「戎」や「夷」と書くことは、中央政府が地方の民や東国の者を「えみし」や「えびす」と呼んで、「戎」や「夷」と書いたのと同様に、異邦の者を意味する。

諸命以 私たちが生きるということ 修学旅行で何を修学したのか？が問われること

君たちが第4世代！？ 2040年代～

若者・ばか者・よそ者の協働

デザインする・・・職種（キャリア）の違いのものが集まって
地域の持続可能性 対話を始める

第3世代・・・地域おこし協力隊 2010年代～
多種少量多用途；ニーズとニッチ
雑木を植える

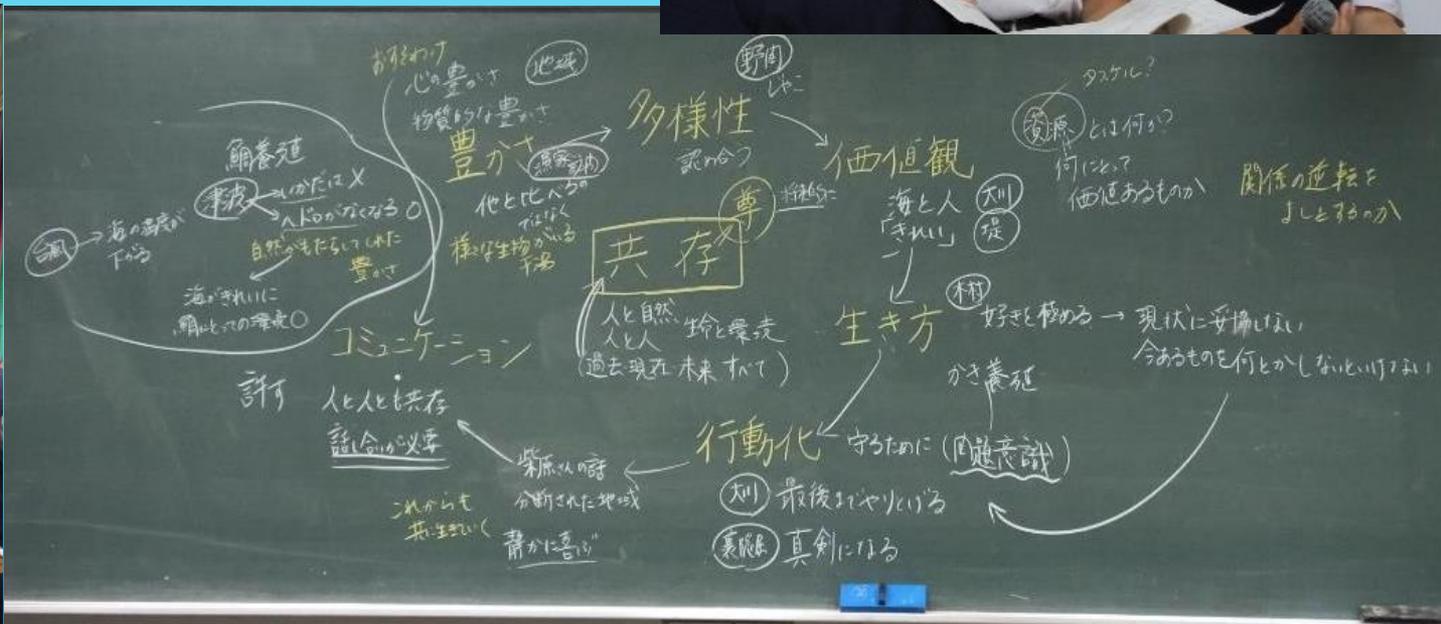
SOS

保存・収集
第1世代 1950-70年代
芦浜第1期 漁業・真珠
間伐 植林する

守る・保全
第2世代 1980-2000年代
芦浜第2期 ハマチ・タイ・流通
やせた山 緑があれども山とは言えない
放置林 森は海の恋人 畠山さん

「諸命以」は古事記の伊弉册岐（いさなきのみこと）、伊弉册美（いさなみのみこと）の話の冒頭に出てくる言葉で「もろもろのみこともちて」と読む。この言葉は古事記を通じて重要な言葉だ。この宇宙は全て創世の神々が造られたもので全ての思考や行為は悉く神々の命（みこと）のままだとも意味。今、使い捨て脱ぎ捨てる文化が日本を席卷しているが「ものを大切にしなければならない」との思想は重要だ。日本中、ゴミの山だが、全ては神々のものであり、私たちが授かっている命さえも、もともとは「諸命以」授かった命を何に使うか、どう使うか、それが人が生きるということなのだ。

臨海実習の事後学習での
主体的・対話的・深い学
びからESDの価値観へ
の気付きへ。学びの中の
子ども・教師の変容
共尊の発見



[4]民泊への転換

なぜ、私たちは民泊に転換したのか？

【学校の論理】

- ・大きな理由は費用面 ホテル代より民泊の方が割安になる。
- ・少人数単位になる場面転換 生活指導面から

【学びの文脈】

- ・地域住民の声（本音）を聞く機会をもつ
- ・地域の共同（結；ゆいまーる）の一端にふれる・・・ひとが生きる場所に「ある」もの
- ・農・食・暮らしの日常を識る・・・生産や生活の現場が見える日常の風景との違い
- ・遠くの家族を想う機会をつくる・・・多様な家族のカタチがあることもうひとつのふるさとづくり

【地域の論理】

- ・過疎化する地域の活性化
- ・地域アイデンティティの形成 光を観せる⇔光を観る
- ・災害・天候による1次産業の不安定収入への経済的補償（自立した保険制度）

しかし、、、どうしても 民泊は預けっぱなしのところはぬぐいきれない。。。

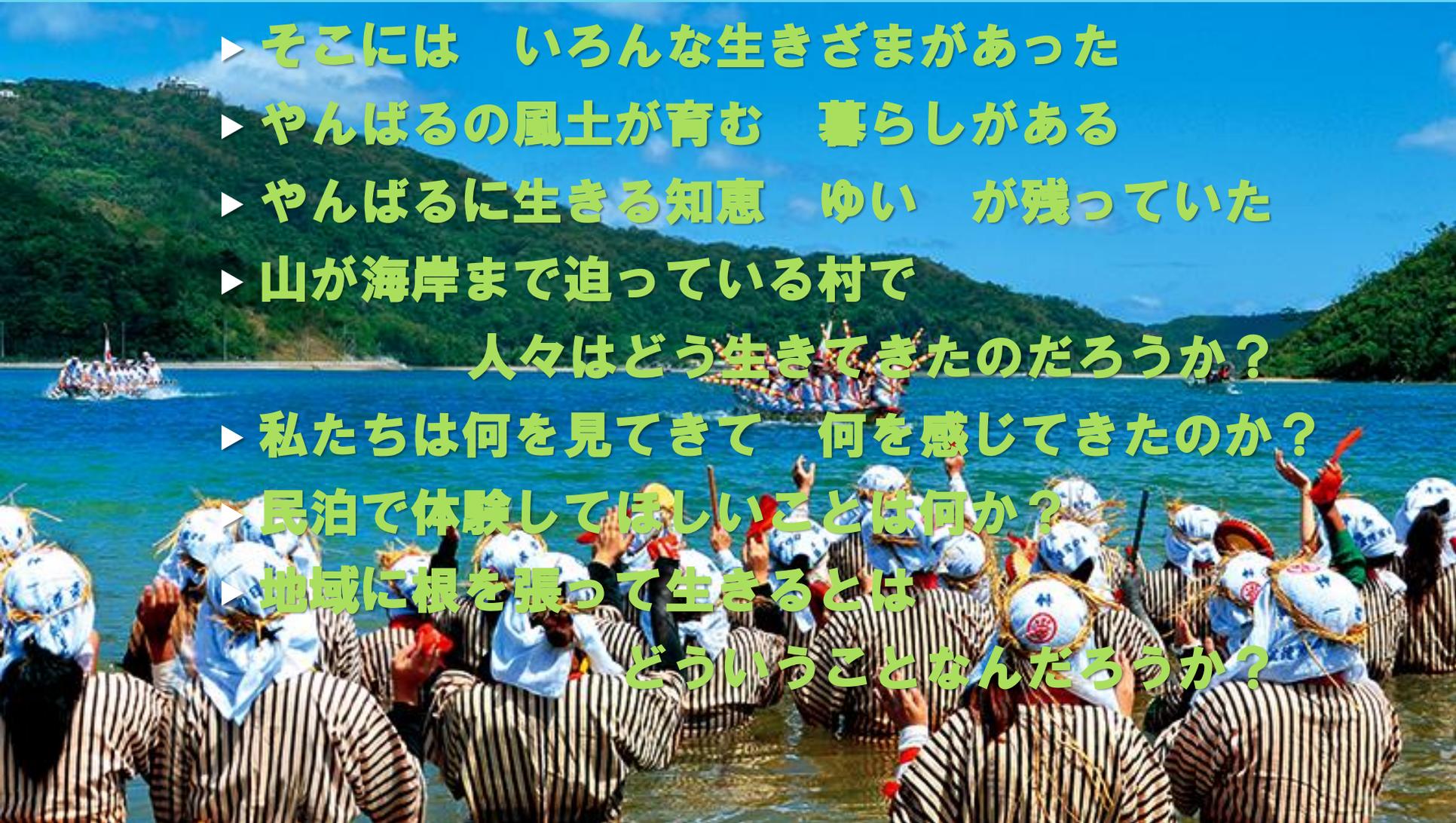
- ・読谷村では、、、出会いの感動を演出する趣向を感じ取った
- ・大宜味村では、一緒に民泊を盛り上げていく演出を企画できた。修学旅行を企画する教師が民泊を体験していないということ。共に何かをつくるということはそれなりに面倒なことかもしれないがそこに一歩でも民泊先と周辺の人たちに踏み込めれば民泊の面白さが見えてくる。つながりがあるから つながれる。

やんばる（大宜味村・国頭村） 探検！発見！！ほっとけん！！！！

- ▶そこには いろいろな生きざまがあった
- ▶やんばるの風土が育む 暮らしがある
- ▶やんばるに生きる知恵 ゆい が残っていた
- ▶山が海岸まで迫っている村で

人々はどう生きてきたのだろうか？

- ▶私たちは何を見てきて 何を感じてきたのか？
- ▶民泊で体験してほしいことは何か？
- ▶地域に根を張って生きるとは
どういうことなんだろうか？



そこにあるのは光

海があり 水があり 山があり 恵みがある
どうしてそれが あり続けるのだろうか？



全身で感じよう！ やんばるの光

出会った風景や人から私たちは何を学ぶのか 民泊先の方々は やんばるのインタープリター



やんばるの森の中には現実もある
そしてそれは隣り合わせの日常でもある
とどかない 共存と生存 の声がある



そこにわたしたちは 耳を傾けられないだろうか？

永遠なのか本当か
時の流れは続くのか
いつまで経っても変わらない
そんな物あるだろうか

見てきた物や聞いた事
いままで覚えた全部
でたらめだったら面白い
そんな気持ち分かるでしょう

民泊はドッキリ！の連続
なぜなら、そこには私の知らない
生活があるから。
終わってみて気付くこと
それは、遠くに親戚ができたかなって
そんな 幸福感。。



答えはきっと奥の方
心のずっと奥の方
涙はそこからやって来る
心のずっと奥の方（ザ・ブルーハーツ「情熱の薔薇」）



やんばるの持続可能性とは何かを ここに留めて



[5]学生ガイドと共に そして. . . .

■学生ガイドと共に歩んできた附中修学旅行

- ・なぜ、学生ガイドだったのか？斜めの関係から 沖縄の語りを聴く 近い世代の考え方を知ることの意味。自分ごと化へ。
- ・未完成であるがゆえに お互いの学びと気づきと育ちが生まれてくる
- ・学生であるがゆえの 交信の自由度がある・・・ICT活用の強み スカイプ活用
- ・お互いが要求されて育つ場面がある
- ・出前授業という行動力とインパクト
- ・事後学習の協働制作・・・持ち帰った「問い」への応答ができる
- ・次世代の語り部が育つ機会 沖縄で生まれ 学び 生きることへ

■がちゆん というインパクト・・・それは、生徒だけでなく教師にとっても

- ・ワークショップによる振り返り 現地でタクシープランのシェアリングをするという発想 そこまでパッケージ化された企画
- ・「ひとに出会う」という新企画を共に創って
- ・がちの「ガイド」でなく、がちで「ゆんたくする」ことの値打ち
あなたの体験が問い返されること 対話と内省
その体験はどこに位置づけられ つながっていくのかという気づきを促す

■がちゆんのあとにがちゆんはあるのか？

- ・学生ガイドの課題
- ・学生ガイドと共にタクシープランを作ってきたが故の悩み

[6] 沖縄にしかない学びの意味と価値とは何か？

思い出づくりか？平和学習か？

はざまに揺れて考えてきたこと・・・

どうして 沖縄に行くのだろうか？

平和学習を沖縄でする・・・私たちの日常の風景に戦争が見えなくなった
剥き出しの「戦争」の現場(基地)がある

しかし、目の前に海があり、森があり、民芸があり、信仰があり、唄がある。

子どもたちの関心は むしろそちら側にあるかもしれない。

すべてをわずかな沖縄滞在期間中に見られないから

できるかぎり 時間の許せる範囲で見せてあげたい。

何かを焦点化して見せようと意図することは 必然的に何かを見せなくさせてしまう
ことでもある。

私たちは沖縄の何を見せなかったのだろうか。。。自問自答する。

それは、私たちが日常的にみようとしないものと同じ構図ではないのか？

ここで 暫定的な結論として

沖縄へのリピーターとして 沖縄をもっと知りたいという

そこには 誤解や 思い込みがあるかもしれないけれど

私の「沖縄の旅」の物語を二次制作してみようという価値ある出会いを

つくること。⇒教師＋ビューロー＋旅行者＋現地の協働による。

つまり、形成される意味や価値には 続きがあるのだという余白を残すこと。

[7] 新たな柱を求めて

ESD SDG s の学びの深化から

どういうねらいで 深い学びがはじまったのか？

▶ 出発点となった 「2017年臨海実習からの提案」の背景

■ 学びに向き合えない教室 引きずる人間関係のストレス
がもたらすもの

…ここで私の何が成長してるんだろう？ 停滞、不信、
あきらめ 関係（意味）を壊していく言葉たち

■ 学ぶことが、なぜ学ぶ喜び、生きる喜びに変わらないの
だろうか？

…成長の節目になってきた「総合」が機能しないジレンマ
教科指導の根源的な「問い」があるのではないか？

■ それは、「なぜ、学ぶのか？」という意味に答えていな
かったのではないか？

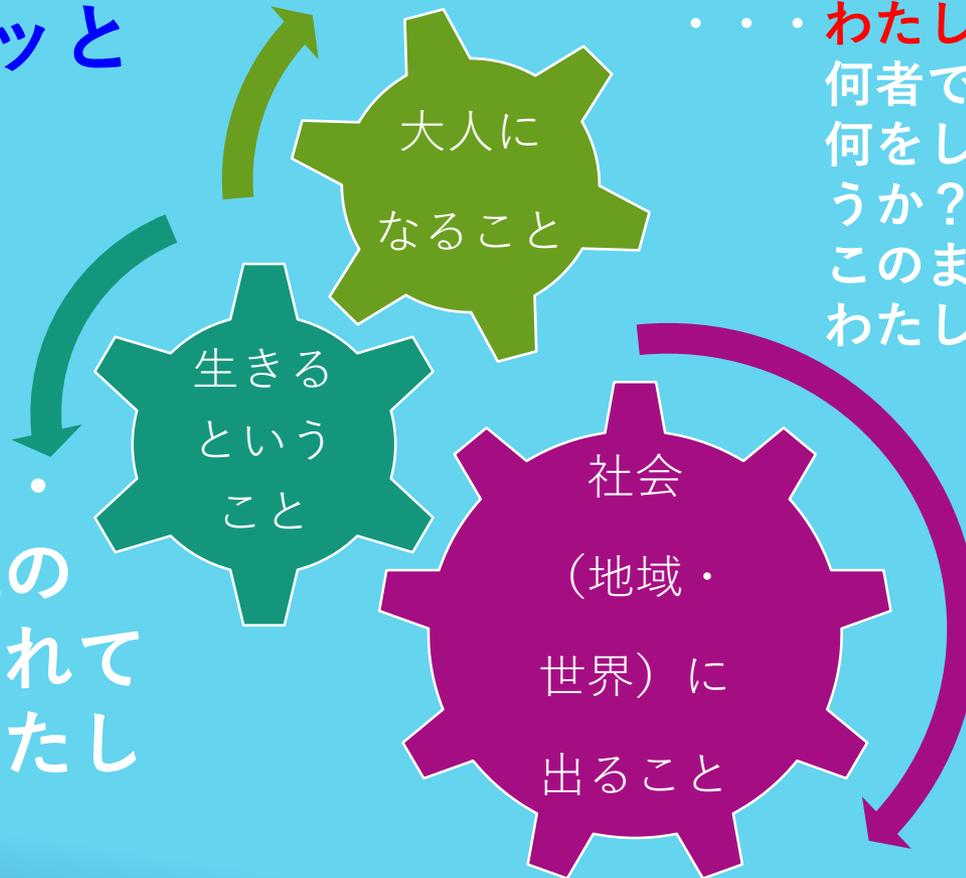
…意味に向かう前の沈黙 ⇒ 人に出会うとき

場所に出会うとき

意味に向かう言葉が生まれる

学びがESDであること。。。 私たちに何ができるのか？

歯車がカチッと
音をたてて
出会う場面



・・・わたしは
何者で、
何をしたいのだろ
うか？
このままの
わたしでいいのだろうか？

・・・私たちが
価値を創る
どのような未来
に出会いどの
ような社会を
生きたいのか

あなたと・・・
多様な価値観の
共存必要とされて
いるあなたわたし

そして
ふたたび
学ぶということへの問
い直しと語り直し

ともに「ある」ことの学び
「ある」とは、自・他・社会に
価値を積んでいくこと

「現場」 「共感→自分ごと化」 「知った責任」 「表現者」

■なぜ ひとに出会うのか？

- ▶ ESDとは、「技術的な課題を越えて、子どもとかかわる教師の生き方や大人社会のあり方じたい問われること、またESDとは人間存在の深まりのプロセスである」
(永田佳之「持続可能な教育実践とは」せせらぎ出版,2006)

- ▶ ESDは、「暗示的に、いわば隠れたカリキュラムとして、ESDの価値観やスピリットが、子どもたちに伝わっていく」(永田2006)と言われるように、「教える内容よりも、ときとして、その教え方・学び方のスタイルそのものの方が、エッセンシャルでありうる」

(吉田敦彦『世界のホリスティック教育』日本評論社,2009吉田2009)

- そのひとの語り・人間存在、教え方・学びのスタイルの中に ESDがあるから 主体的である前に、内発的である。

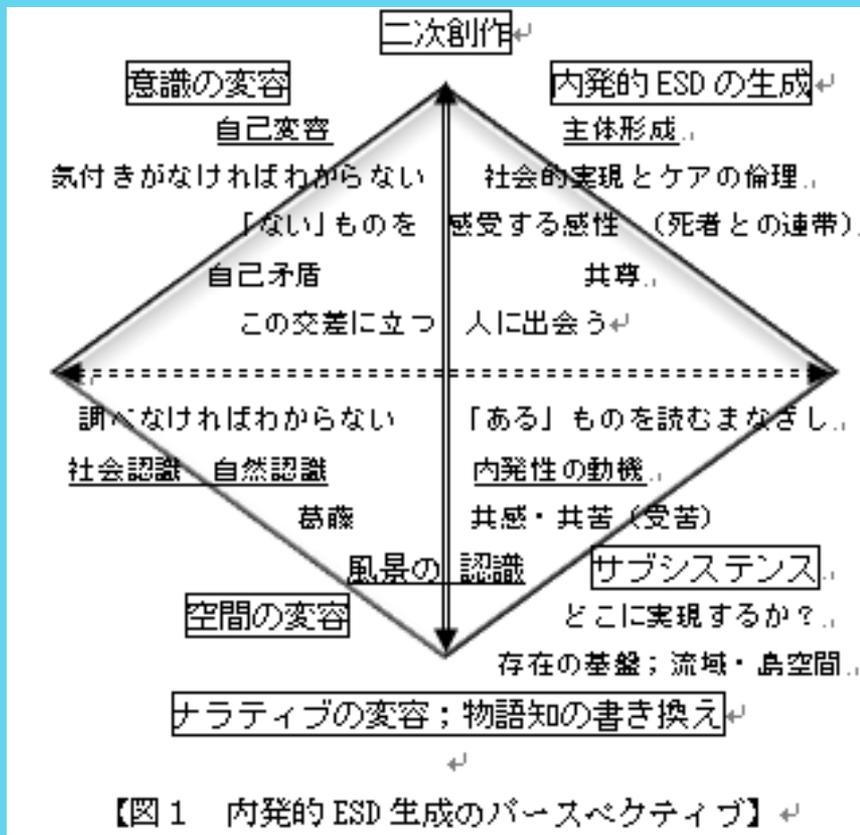
総合的な学習の時間としての沖縄修学旅行

ESDの学びの深さはいかなる価値の上にあるのか？

「見ることの深さ」がある。
 「感受することの深さ」がある。
 「内発的」である。

(1) 人間存在の基底に立つ
 『人間共通の低みに立つ』（滝沢克己）。
 それは一身独立の人民であろうとする生き方であり、いかにいえばピープルとして生きることを目指すということである。
 (花崎阜平『田中正造と民衆思想の継承p239])

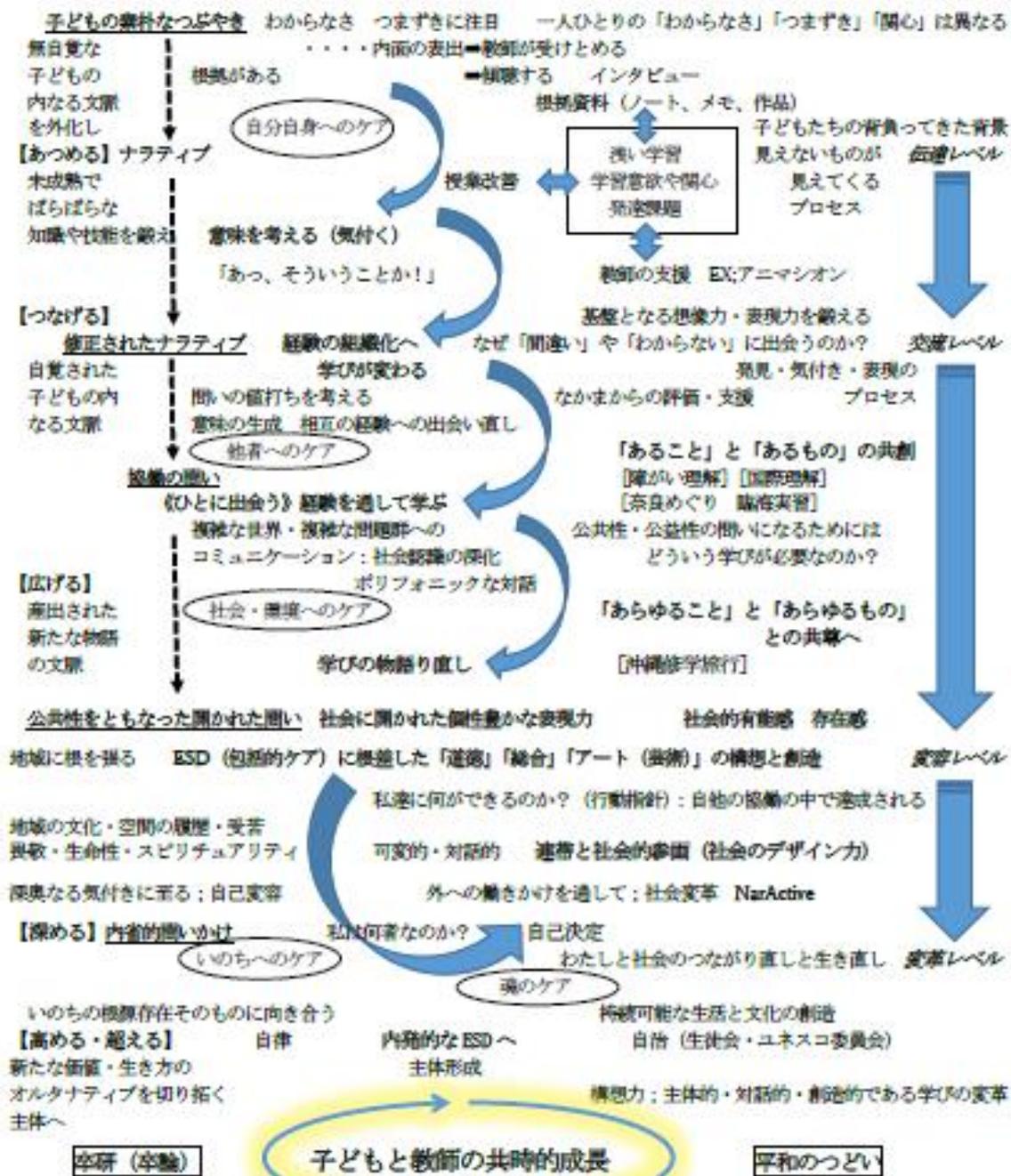
(2) いのちを中心にしたサブシステムの思想
 民衆思想は、山、森、野、川、海、などを、人間の欲望充足のためにどのように処理、処分してもよい資源とはみなさず、生命の再生産の主体とみなし、人間はその営みに寄りそうべきであるという主張を核心に持っている。(中略) 安里清信の表現では「生産基盤に根を張る」ことである。生産基盤に根を張る生き方は、悠久の時間を感じ取り、過去と未来を現在に総合する営みである。この場合の生存とは、個人の生存ではなく、「類的な、永遠の、絶対的な生存」(安里清信)を意味している。



【図1 内発的ESD生成のパースペクティブ】

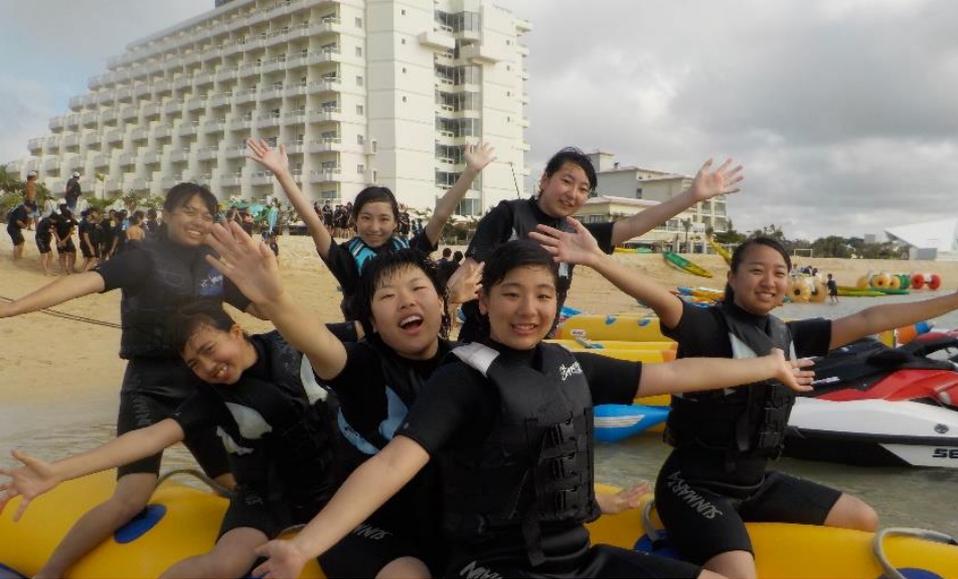
(花崎阜平『田中正造と民衆思想の継承』 p240-241)

持続可能な社会の作り手を創出する
 ディープなアクティ
 ブ・ラーニングの
 見取り図を描いてみる
 そこには地域、自然環境、死者も含めた他者、自分自身、
 まだ見ぬ世代を
 ケア（責任）する
 主体として育つ
 子どもたちの
 内発された姿が
 見えてくる



[8] 課題として残されたこと 中学側の思いと提言

- ① 修学旅行はそもそも必要なのか？という問いに対して
- ② 子どもの貧困問題として 旅行代金が払えない課題に直面して
 - ・逆に 沖縄側からの学校現場の問題としても
 - ・妥当な 費用はどれくらいなのか？ 将来のリピーターへの先行投資
- ③ 平和学習の場としての コンテンツの課題・・・何を学ばせたいのか？
 - ・語り部の不在に直面して 開発による戦争遺跡の喪失
 - ・子どもたちの多様な「平和」観 問われる教師
- ④ 学生ガイドか現地ガイドか もう一つの可能性はないのか？・・・どう出会わせるのか？
課題をもってジャンボタクシーでまわることのコストパフォーマンス
 - ・バスガイド協会への依頼 乗車ガイドのプロ+現地案内人(インタープリターの養成)
 - ・沖縄⇄奈良 という学校間交流 (EX:興南中・高)
- ⑤ つくる修学旅行へ・・・教師が「つくる」ことの楽しさを経験する
 - ・オーダーメイドできる納得旅
- ⑥ 事前学習か？事後学習か？ 修学旅行の記録をどう残していくのか？
- ⑦ 慌ただしい修学旅行のままでいいのか・・・沖縄との出会いの衝撃とは何か？
 - ・そこに流れる時間に出会いなおす
 - ・何もしない、ただそこに「いる」だけの修学旅行は可能か？・・・離島という魅力と可能性



ご清聴ありがとうございました

An aerial photograph of a coastal town. A long bridge spans across a body of water, connecting a small island on the left to the main landmass on the right. The water is a vibrant turquoise color near the shore, transitioning to a deep blue further out. The land is covered in lush green vegetation. In the foreground, a large, rectangular floating structure, possibly a fish farm or aquaculture facility, is visible in the water. The sky is clear and blue with some light clouds.

大宜味まるごとツアーリズム×奈良教育大学附属中学校